

岩手医科大学歯学会第6回総会抄録

日時：昭和55年11月8日（土）午前10時

会場：岩手医科大学歯学部講堂

演題1 体性感覚野 S1 の様相特異性 (mode specificity) に対する疑義の提示

○鈴木 隆, 松本 範雄, 平 孝清
佐藤 匡

岩手医科大学歯学部口腔生理学講座

Mountcastle はネコの体表の触覚, 圧覚は大脳皮質体性感覚野に投射し, 皮質ニューロンの配列と末梢受容野の位置関係には明確な対応があることを明らかにした。その際, 触覚, 圧覚, 深部感覚の三感覚野の特定部に投射するのであって, 他の感覚 (例えば痛覚, 温度覚など) は同一局部に投射されることはないと報告した。これを様相特異性と言う。

しかし, 我々は今回, この様相特異性に従わない現象を観察したのでそれを報告する。

①ネコの冠状回の顔面・口唇野の単1ニューロンのうちには, 口唇, ヒゲなどの触・圧刺激などの外に, 歯髄の侵害刺激にも応ずる polymodal な性質をもったものがあつた。

②元来, 歯髄は痛覚しか受容しないので, 上記ニューロンは皮膚の機械的受容器からの入力を受けるほかに痛覚受容器からの情報を収束していることになる。

③触覚受容野の配列を指標にし, 同一の機能的円柱で観察された歯髄応答ニューロンの放電パターンは殆んど同じカテゴリーに属するものだけが見え出された。

④同一の機能的円柱内でみられる歯髄応答ニューロンの末梢受容野の面積は比較的小さいが, その円柱の性質を特徴づける共通項的受容野のあることが判明した。

⑤共通項的受容野の生理学的意義は歯痛部位の特徴抽出機構と関連すると考えられた。

⑥以上の成績は, 大脳皮質体性感覚野の顔面, 口唇野では, 四肢, 体幹野に見られる様相特異性 (mode specificity) が存在しないのではないかとこの想定を示

唆する。

質 問：石川 富士郎 (歯矯正)

1) 感覚野の広さは他の動物と比べてどうですか。
2) 触感覚と痛感覚が共に存在するとのことですが, それぞれの部位別によって両者の分布密度に差がありませんか。

回 答：鈴木 隆 (口生理)

1) 顔面野の広さについて

ネコのような夜行性動物の whisker area とか lip area は他の動物に比し広い。

これは動物の摂食行動などと大きな関係があると思う。

2) 触覚ニューロンと痛覚ニューロンの分布密度について, 今日話した whisker, lip area では歯髄応答性ニューロンの数は少なく数パーセント代である。

演題2：本邦における悪性喉頭腫瘍剖検例の統計的観察

○村田 厚, 藤沢 容子, 野田 三重子
守田 裕啓, 佐藤 方信

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

近年, わが国の喉頭癌患者数は顕著な増加はみられないがこれまで喉頭癌の発生頻度は, 全人癌の2%よりは少ないといわれてきた。しかし, わが国で悪性腫瘍発生率第2位の座にある肺癌に近い将来に現在発生率第1位の胃癌にとってかわるであろうともいわれ, 呼吸器における悪性腫瘍はますます重要な位置を占めつつある。そこで演者らは本邦における悪性喉頭腫瘍の実態の一部を解明する目的で日本病理剖検輯報 (第15~19輯) より悪性喉頭腫瘍症例を集計し, 若干の統計的観察を行ったのでその成績を報告した。

日本病理剖検輯報 (第15~19輯) を基に悪性喉頭腫瘍剖検例 363例 (男性 326例, 女性 35例, 性不明2例) を集計し, 統計的に観察したところ, 次の結果を

得た。

1. 男女比は 9.3 : 1 と男性が圧倒的に多かった。
2. 剖検時の平均年齢は 65.0 歳 (男性 64.8 歳, 女性 66.5 歳) であった。症例の年代分布では 60 歳代 (39.9%) が最も多かった。
3. 組織型別症例数では扁平上皮癌が 318 例 (97.6%) で症例のほとんどを占めていた。
4. 原発部位では声門上部が 12 例 (48.0%) と最も多く, 声門部が 11 例 (44.0%) で, 声門下部は 2 例 (8.0%) と少なかった。原発部位別にみた死亡時の平均年齢は声門上部が 60.3 歳, 声門部が 67.2 歳, 声門下部が 79.5 歳となっていた。
5. 転移については臓器とリンパ節のいずれにも転移の認められた症例は 132 例 (41.3%), 臓器にのみ転移のあった症例は 96 例 (30.0%) で, リンパ節にのみ転移のみられた症例は 20 例 (6.2%) であった。
6. 悪性喉頭腫瘍と他の臓器との重複癌症例は, 65 例 (二重癌 60 例, 三重癌 5 例) で, その平均年齢は 78.4 歳と高齢であった。
7. 副病変としては肺炎が最も多く, 肺膿血および肺水腫, 気管支炎など, とくに呼吸器に関連するものがその大半を占めていた。また頸部血管破裂が 22 例 (6.1%) もみられたことは, 注目すべき所見であった。

質 問: 石川 富士郎 (歯矯正)

1) 同年代における悪性咽頭腫瘍剖検例との比較ではどうですか。

回 答: 佐藤 方信 (口病理)

1) 死亡時の平均年齢では悪性喉頭腫瘍の 56.0 才と比較して, 悪性咽頭腫瘍が 65.0 才と高齢であった。また重複癌の占める割合では悪性咽頭腫瘍では 8.2% に対して, 悪性喉頭腫瘍では 17.9% とはるかに高率であった。

質 問: 佐藤 匡 (口生理)

1) 悪性喉頭腫瘍の発生頻度は女性より男性の方が非常に高い値になっていますが, この点についてはどの様に解釈すれば良いのでしょうか。

回 答: 村田 厚 (口病理)

石川先生への解答

私も 1972 年～1976 年 5 年間における喉頭癌症例を集計しましたが, これ以前の症例について同じような観点から検索しました成績はありません。

佐藤 (匡) 先生への回答

日本病理剖検輯報にはその性別発生頻度を示唆するような事に関しては記載されておりません。従来の報

告では喉頭癌は男性の疾患であるといわれ, その理由については不明であります。喉頭癌発生には習慣, 嗜好, 職業などの諸因子について多数論じられています。

演題 3 人舌筋にみられた Lipofuscin の病理学的検討

・佐藤 方信, 畠山 節子, 鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

Lipofuscin (Lfc) は人体の種々の器管と組織で見出されているが, 口腔領域の筋についてこれを検索した報告はこれまで本邦ではみられない。そこで我々は比較的運動量にとむ舌筋について Lfc を検索したのでその結果を報告した。

〔材料・方法〕 本学医学部第一病理および歯学部口腔病理学教室にて剖検した 89 例の舌を用い, それぞれ舌尖部, 舌体部, 舌根部を前額断として切り出した。標本はパラフィン切片とし, H.E., PAS, Massom Fontana, Sudan Black B および Ziehl-Neelsen 染色などを施して検索したほか, 未染の標本を用いて螢光顕微鏡にても観察した。Lfc の舌各部位における沈着度は Dayan ら¹⁾の基準に従い, group I, group 2, group 3 の 3 群に分けた。また各症例における Lfc 沈着程度の総合的判定は切り出した 3 部位のうち, 2 部位以上で示した Dayan ら¹⁾の基準をこれにあて, それぞれ Group I, Group II, Group III とした。

〔成績〕 1. 検索した 89 例のうち 72 例 (80.9%) の症例で Lfc の沈着がみられた。

2. Lfc の沈着度別に症例をみると Group I が 9 例 (12.5%), Group II が 45 例 (62.5%), Group III が 18 例 (25.0%) であった。

3. 若年層では Group I に属する症例が多く, 年齢を増すに従って Group II がこれに代り, 高年齢層では Group III に属する症例が多くなっていた。

4. Lfc 沈着程度群別の平均年齢は Group I が 33.7 ± 9.4 才, Group II が 63.3 ± 10.1 才, Group III が 73.1 ± 9.8 才であった。いずれの Group 間にも有意の差がみられた ($P < 0.001$)。

5. Lfc の沈着度を舌の部位別にみた場合, 舌尖, 舌体, 舌根のいずれの部位にも等しく沈着していた症例が 25 例 (37.5%) で最も多かった。